法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

長谷川博教授のこと

著者	増島 宏
雑誌名	社會勞働研究
巻	19
号	1-2
ページ	9-16
発行年	1973-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017956

長谷川博教授のこと

増島　宏

芝田進午君と私とは、社会学部の第一回目の研究助手であった。昭和二八年のことである。いまでも、当時の採用試験の光景を思い出す。外国語二ケ国語のほかに、提出した論文の面接試験があった。創設期の社会学部の全スタッフが顔を揃えていたように思う。栢野、湯川教授らが最年少の頃であり、逸見学部長をはじめ、村山重忠、近江谷駒、服部之聡ら、錚々たる顔ぶれであった。私はイギリスの初期労働運動の政治的性格について書いた。『チャーチズムの成立』という論文を膝にして、全教授の前に腰を掛けさせられた。質問は活気に満ちていた。たしか生理学の栢植教授もいくつかの鋭い質問をしたように思う。私はオオカミの包囲の中にある小羊のように、次々にとび出す多彩な攻撃に対応しなければならなかった。もちろん、教授諸君が意地悪く振舞ったわけではない。むしろ談笑のうちに私の全人格を見据えるといったユニークな試験風景であった。このなかで、すでにチャーチズムについて論文を書いておられた長谷川教授は、学問的内容に入って、温和な調子で質問をした。そして、すっかり上ってしまった私に、しばしば助け舟の誘導質問をしてくれたように思う。

こうして、当時麻布三ノ橋にあった古色蒼然たる校舎で、私の社会学部における助手生活がはじまった。爾来長谷川教授には、公私にわたってお世話になった。私の若い時代の研究生活の中で、逸見学部長をはじめ、当時のユニークな教授の方々は、すべて、人生経験の豊かなひとびとであり、学問の分野だけではなくて、全生活領域にわたって、まことに示唆に富んでいた。長谷川教授もそのひとりであり、戦前、学生時代から社会改革の情熱をたぎらせてきていた。そして、ひときわぬきんでて、どんな嵐にも屈しない志操の高さを具えていた。

当時、長谷川教授は京王線初台駅近くの家の離れの一室を借りて住んでいた。裏手にまわって、教授の居間に行くと、薄暗い部屋に無雑作に本が積まれていた。その狭い一室で、ドテラをひっかけた教授は、いつも、気軽に部屋の中に招じいれてくれた。孤高の漢学者を思わせるたたずまいであった。ここで、しばしば研究の問題について長時間論じあった。あえて、「論じあった」といったが、それは、教授が非常に聞き上手であり、若い気負った議論にも、ひとつ、ひとつ答えながら適切な指導と助言を与えてくれたからである。

私は服部之聡教授からも教えをうけたが、服部教授はどちらかというと、若い私達の理論的質問には、まともに答えてくれることはすくなかった。ときどき、ラジオに出演したあとの出演料や原稿料をもって、「奢ってやるから、俺についてこい」というような親分肌のところがあった。芝田進午君と私で鎌倉のお宅を訪ねたときのことである。談論風発、実に面白い座談のあとで、帰り際に、奥様に「この二人はこれから、黙ってうちの敷居をまたいでもよいからな……」といわれたことがあった。私はいささか驚いたが、淋しがりやで、粋人で、話し好きの服部教授の一面がにじみ出ていた。長谷川教授は服部教授とは、まことに対照的であった。若い私達の研究上の発言にも、常に新鮮な興味を示し、こちらが、たわむれに質問したようなことでも、丹念に原典に即した研究を行い、つぎつぎに原理論

に溯って議論を展開していった。すでに老成した趣をもった服部教授とはちがって、長谷川教授は、原理原則に忠実であり、私達の書生風の議論にも真向から応えてくれた。長谷川教授のこのような研究態度には大いに教えられるものがあった。

長谷川教授の略歴

長谷川教授は一九〇三（明治三六）年三月十五日、愛知県一宮市に生れた。それは日露戦争の前夜であり、長谷川教授がその発展に若い情熱を傾けた日本の労動運動の黎明期でもあった。またこの年の暮、片山潜は国際労働運動との連帯をめざして第二インターナショナルの大会に出席するため渡米した。この片山潜の研究については後にのべるが長谷川教授はその先駆者であった。

一九二五（大正十四）年仙台の第二高等学校理科乙類を卒業、京都帝国大学経済学部に入学した。関東大震災前後の激動の時期に旧制高等学校生活を送った長谷川教授は、すでに英文の共産党宣言を読み、新しい思想に魅せられていた。こうして医者志望をやめ、河上肇博士を慕って京都に学んだ。京都大学では早くから革新的グループに接近し、日本の変革について若い情熱を沸らせた。

一九二八(昭和三)年一月産業労働調査所京都支所所長となり、三月には京都帝国大学を中退し、三・一五事件など弾圧の嵐の吹きすさぶなかで、労働者、農民の解放運動、反戦反帝の実践運動のひととなった。その後いくたびかの逮捕投獄、官憲の追及のなかで自活の道をえらびながら、解放運動への情熱を失うことはなかった。この間、合資会社野々垣毛織工場、東京新聞編集部記者、日本マグネシウム株式会社などに職を求めた。しかも、長谷川教授は、仕事

の一方で、世界の労働運動、高まりつつあった人民戦線運動などの研究をつづけ、片山潜や、彼がその研究のために情熱を傾けた日本の米騒動（大正七年）にも強い関心を示していた。

第二次世界大戦後、長谷川教授の強い学問への関心は、漸く、その実りを結ぶ職場をうることになった。一九四六（昭和二一）年から株式会社解放社の編集顧問をつとめた後、一九五一（昭二六）年法政大学法学部講師、中央労働学院講師となり労働運動史を講ずることになった。中央労働学院と法政大学との合併後、法政大学社会学部講師となったのは、その翌年のことであった。一九五七（昭和三二）年以来、今日まで法政大学教授として、教壇にたち、労働運動史、日本経済史などを講じ、日本の次の時代を荷う若い学生達の指導にあたっている。

長谷川教授の研究

長谷川教授の研究の跡をみると、一筋の赤い糸によって貫かれている。それはすでにのべたように、労働者階級の解放の道をひたすらに追及しようとする姿勢である。戦前一九三六（昭和十一）年の著書に、ドニエプロストロイの経済的意義（全協社）があるが、早くからソ連の社会主義建設に強い関心を示していたことがうかがわれる。戦後研究活動に入ってからは、多彩な業績を残しているが、それらは大別すれば第一にマルクス・レーニン主義の古典の紹介、第二に、片山潜の研究、第三に、米騒動史の研究、第四に、パリコンミューンその他国際労働運動史の研究、に分類できる。もちろん、長谷川教授は、他人をおしのけても自分を売りこもうとするタイプではない。むしろ静かに、地味な研究にうちこみ、それが多くの研究者に利用されることを心から喜ぶような、そういう研究者である。だから、その業績をみればわかるように、多くの場合、日本の労働運動その他で、先駆的な、土台石を築くような役

割を演じてきた。さきにあげた分類に従って業績を紹介すると、第一の部類では、訳書として、「フランスの内乱」（昭和二三年真理社）、「クーゲルマンへの手紙」（昭和二三年大月書店）、「マルクス・労働者調査」（『新しい世界』昭和二六年）などがある。第二には、昭和二十四年、真理社から出された『片山潜選集』があり、これは日本の民主主義社会主義運動のなかで果した片山潜の偉大な役割を明らかにした、先駆的な業績であった。長谷川教授は、この編集の中心的役割を果した。そのほか片山潜に関する論稿は多数あるが、その主なものをあげれば、「片山潜、日本における一九一八年の米騒動」（昭和二十六年歴史評論）、「片山潜」（日本歴史講座第六巻）、「片山潜とその家族」（社会評論、昭和二十九年九月号）などがある。これらの研究のなかで、長谷川教授が綿密な調査によって明らかにした貴重な資料は枚挙にいとまがない。片山潜の生家や戸籍にまでたちいって調べたのは、恐らく長谷川教授が最初ではないであろうか。第三の米騒動史研究については、直接に指導をうけた私は有形、無形のはかりしれない学恩をうけた。また幸いなことに、私が社会学部助手になって以来、長谷川教授の重要な関心は米騒動にあり、学生を動員しての数次に及ぶ現地調査など、米騒動研究に新しい境地を開き、質の高い業績を残している。その主な論文は、「米騒動の第一段階」（社会労働研究、一、二号）、「米騒動の研究」（昭和三二年、経済学入門第三巻、日本評論社）、「一九一八年の米騒動に関する文献」（社会労働研究、第十四号上、昭和三六年）などである。これらの研究のなかで、長谷川教授の明らかにしたのは次のようなものである。第一に、全国各地に拡大した米騒動を段階別にとらえ、それらの各段階における運動の質を明らかにするとともに、各段階の相互関連を明らかにしたこと。そのためには、典型地帯、富山、神戸、九州、岡山、など日本各地で綿密な個別調査を行った。そして、これらの特殊性を通して、日本米騒動の性格を明らかにしようとした。第二には、片山潜の研究をうけつぎ米騒動の革命的意義を明らかにするとと

もに、米騒動におけるプロレタリアートの指導性を強調した。このような研究の姿勢を一貫した長谷川教授の業績の意義は、戦後の研究のなかでは特筆大書さるべきである。しかし、プロレタリアートの指導性の強調は、米騒動の全人民的運動としての性格を軽視することになってはならない。この点で、長谷川教授の研究は若干の批判をうけた。第三に、長谷川教授は、米騒動の研究を集大成し、その研究史的総括を行ったことである。このような地味な仕事は、今後の新しい研究者にとって、はかりしれない便宜を与えるものである。

第四の部類の研究としては、「ゼネスト史論」（労働旬報、昭和二十七年十月号、二十八年二月号）、「世界労連、国際自由労連、国際労働機構」（世界文化事典）、「国際労働組合運動史」（政治経済基礎講座、第一巻）、「展示されたパリ・コンミューン文献」（社会労働研究第十七号、第二十二号）などがある。ドイツ語、英語、中国語、フランス語を能くする教授は、原典をよみながら、丹念に国際労働運動史に関する研究をつづけた。特に、パリコンミューンの研究についてはひとつの執念をもちつづけ、海外留学の際にはパリ・コンミューン百年祭に参加し、資料の収集につとめた。これらの研究成果の発表については、さらに今後に期待される。

長谷川教授と学生達

長身痩軀、むしろ無愛想な長谷川教授の周辺には、不思議と、熱心な学生達が集り、彼らは卒業後も先生との交遊を心から喜ぶ風であった。古い先輩達も、新しい卒業生達もそうであった。それは、長谷川教授の長い人生経験からうみだされる、ある種の人間的魅力ともいうべきもののなせるわざであろうか。

富山県滑川に、学生数人をつれて米騒動の調査にいったことがある。現在の社会学部教授斎藤博孝君、法政大学出

版局の稲義人君や、法政大学講師の松島春海君、が学生の頃のことである。あのきびしい日本海の海岸で、長谷川教授は見事に泳いでみせた。高等学校時代水泳部に所属していたという。研究でも、レジャーでも、長谷川教授は学生と同じような好奇心と、熱心さを示し、学生と一緒に楽しんでいた。恐らく、青春時代を戦争と軍国主義とのたたかいのさなかに過し、およそ謳歌することのできない学生時代を過したであろう、長谷川教授が、あたかも青春をとり戻そうとしているかのように、私には感ぜられた。スキーにも、自動車にも関心を示し、かずかずのスポーツも好きであった。こうして、長谷川教授は、もとめて、若い男女学生とつきあい、その青春の息吹を喜ぶようであった。このような教授の態度は、多感な学生達にも通じ、終生変らぬような教師との交遊、人間長谷川博を求める若者達をうみ出しているのであろう。

また、さきにものべたが、長谷川教授は、学生や私達研究者に、つねに、まともにぶつかり、その相談相手となってくれた。しかもそのひとびとの幅の広さは、むしろ意外なほどであった。ひとも知るように教授は、戦争中も節を屈することなく、解放運動一筋の道を歩いたひとであった。その志操の堅さは、誰の眼にも明らかであった。しかし。自分自身には、きわめてきびしいが、他人に対しては、まことに寛容であった。若い学生が卒業、就職する長い人生の中では、いくたびかの思想的屈節はさけがたいものである。しかし、教授は、どんなひともあたたかく迎えた。現在でも、多くの卒業生がことあるごとに、教授を訪ねるのはこのような教授のあたたかいフンイキによるものである。

このような空気は教授の家庭にもあった。章子夫人は、平凡社に勤め、婦人運動や平和運動の活動家でもあった。そして、教授をたすけて、よき家庭のひとでもあった。私達が遠慮なく教授のうちを訪ねたとき、職場から帰った夫人は、疲れもみせず、短時間に見事な料理をつくってくれた。多くの明治人がそうであるように教授は家庭では無力

であった。夫人が帰るまでは、お茶も、料理も手がけることはなかった。しかし、夫人のおかげで、教授は、どんな客もあたたかく迎え、洗練されたもてなしをすることができたわけである。私達家族が教授の家を訪問したときなど、女房は常に感嘆していた。狭い本に埋れた2DKのアパートの一室で、僅かな時間に、仕上げる料理は、並大抵の腕前ではなかった。そのテーブルの前で、教授は終始ニコヤカに私達と語り合い、ほとんど席をたつことはなかった。現代の家族論からすれば、決して理想の夫ではない。しかし、教授の家庭は、明治生れの日本男児と、それにかしずく、心やさしい妻との、美しい調和をつくっていた。そして、この家庭は日本の民主主義と平和を願う強い心で堅く結ばれていた。

教授は、このような家庭のなかで、いま停年を迎えようとしている。停年は、教授にとっては決して研究の停止ではない。それは、もう一段新しい生活への出発点とさえなるものであろう。教授と夫人がその若い時代に情熱を傾けた革新統一戦線は、一九七〇年代のこれから、一層明るい展望をみせている。教授が従来の研究成果のうえに、さらに新しい研究をつみかさねることが、ますます期待される時代が到来しようとしている。